

新聞4コマ漫画が描く安倍晋三・福田康夫首相(前編)): 両首相在任期間中の3大紙の4コマ漫画に関する 一分析 2006～2008

著者名(日)	水野 剛也, 福田 朋美
雑誌名	東洋大学社会学部紀要
巻	47
号	1
ページ	5-14
発行年	2010-01
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00003077/

新聞4コマ漫画が描く安倍晋三・福田康夫首相（前編）

両首相在任期間中の3大紙の4コマ漫画に関する一分析 2006～2008

Prime Ministers Shinzo Abe and Yasuo Fukuda in Newspaper Comic Strips (Part 1):

An Analysis of Comic Strips in the Three Major National Newspapers in Japan 2006-2008

水野 剛也

Takeya MIZUNO

福田 朋実

Tomomi FUKUDA

1 本論文の目的・方法・意義、および構成

政治・政治家を論評する上で、漫画は古くから主要な表現手段でありつづけてきた。茨木正治によれば、政治漫画の嚆矢は、少なくとも15世紀末から16世紀のイギリスで発行された、宗教改革に関する1枚のパンフレットにさかのぼるといふ。⁽¹⁾

政治漫画は、そのときどきの政情を題材とするため時事性が強く、それゆえ日々の出来事を報道する新聞とともに発展してきた。たとえば、アメリカでは植民地時代から現在まで、程度の差はあれ、政治漫画は新聞報道に不可欠な要素でありつづけている。日本でも、幕末の黎明期から、新聞紙面のなかで漫画はつねに一定の地位を占めてきた。政治・政治家と漫画、および新聞は、過去から現在まで切っても切れない関係にある。⁽²⁾

ところで、世界的に見ても独自性の強い日本の新聞4コマ漫画は、政治・政治家をどのように描いているのであろうか？ 上述のとおり、日本の新聞も創成期から積極的に漫画を掲載してきたが、なかでも4コマ漫画は他国の新聞漫画と比較してユニークな存在である。どのようなニュースが起きようとも、ほぼ毎日必ず最終社会面の左上隅に掲載される4コマ漫画は、日本のほとんどの一般紙にとって「そこになくてはならない」ものであり、多くの読者にとっては読む・見ることが習慣づけられた定番アイテムである。しかし、その人気・認知度の高さにもかかわらず、新聞4コマ漫画の内容を実証的・体系的に分析した学術研究はきわめて少ない。その政治的内容に光をあてた研究は、なおさら少ない。⁽³⁾

本論文は、これまでほとんど研究対象とされてこなかった新聞4コマ漫画に目をむけ、そのなかで日本の最高政治指導者である内閣総理大臣（以後、首相）がいかに描かれているかを分析することで、上述の疑問を解明しようとする試みである。

より具体的には、最近の2人の首相(安倍晋三・福田康夫)の在任期間を時間枠として、3大全国紙(『毎日新聞』・『読売新聞』・『朝日新聞』)の社会面に掲載されたすべての4コマ漫画(朝刊・夕刊とも)を精査し、そのなかから首相を描いている作品を網羅的に抽出し、それらが各首相をどのように描いているかを主に質的に分析する。

分析時間枠(在任期間)は、安倍が2006年9月26日～2007年9月26日(366日)、福田が2007年9月26日～2008年9月24日(365日)で、分析対象とした4コマ漫画の題名・作者名・掲載紙名は、以下のとおりである。

- ・「アサッテ君」東海林さだお『毎日新聞』(朝刊)
- ・「ウチの場合は」森下裕美『毎日新聞』(夕刊)
- ・「コボちゃん」植田まさし『読売新聞』(朝刊)
- ・「ののちゃん」いしいひさいち『朝日新聞』(朝刊)
- ・「地球防衛家のヒトビト」しりあがり寿『朝日新聞』(夕刊)

『読売新聞』の夕刊では、安倍・福田の在任期間中、社会面の4コマ漫画は連載されていない。それ以前は、2004年7月2日号で終了するまで、38年間にわたり「サンワリ君」(鈴木義司)が連載されていた。

分析対象を抽出する上でもっとも重要なのは、「首相を描いている作品」をいかに定義するかであるが、本論文はかなり狭義のそれを採用した。すなわち、「首相を描いている作品」を、次の2つの基準のいずれか、あるいは両方に合致するものに限定した。

- 1) 安倍・福田首相の身体、もしくはその一部を、首相本人であることを判別できる画像として描いている。
- 2) 「安倍」・「晋三」・「アベちゃん」・「福田」・「首相」・「総理大臣」・「総理」など、文字により直接的に安倍・福田首相に言及している。

上述のような狭義の基準を採用した理由は、首相その人が作品の題材として描かれていることが疑いようのない事実として客観的に確認できるもののみを扱うことで、分析対象の抽出(同時に分析から得られる知見)の安定性・確実性を最優先させるためである。もちろん、間接的・示唆的、その他の方法で首相を描いている(と思われる)作品は存在するし、それらに分析価値がないというわけではけっしてない。本論文でも、質的な分析をする際には、定義には合致しないものの首相と関連すると考えられる作品を補足的に分析に加えている。しかし、類似した先行研究が極端に少ない現段階では、できるだけ狭義の定義を採用することでサンプル抽出の精度を高め、可能なかぎり堅実な知見を示し、今後のさらなる研究につなげることが先決であると判断した。小泉純一郎首相の漫画を分析した先行研究(注3を参照)も、ほぼ同じ定義を採用している。なお、小泉を事例とした先行研究は本論文にとって最重要、かつほぼ唯一の比較材料であるため、随所で「先行研究」として参照・引用するが、頻繁に言及するため後注を割愛することを断っておく。

分析にあたっては、先行研究にならい、マス・メディアのフレーム(枠組)概念にもとづく分析

手法を援用する。ここでいうフレームとは、しばしば引用されるトッド・ギトリン（Todd Gitlin）の定義に従い、「言葉であるか画像であるかを問わず、シンボルの使い手が日常的に言説を構成する際に用いる、認知・解釈・表示の一貫したパターン、また選択・強調・排除の一貫したパターン」をさす。簡単にいえば、媒体（新聞4コマ漫画）がどのような枠組・とらえ方・観点で対象（首相）を描いているかに着目する質的な分析手法である。ギトリンによれば、あらゆるジャーナリズム活動にとってフレームは不可避な存在であり、ゆえにそれを分析するためにはフレームの構造を明らかにする必要がある。（4）

次に、本論文にはいくつか重要な意義があるが、主要なものとして以下の3点をあげることができる。

第1に、新聞の政治漫画を分析した先行研究のほとんどが1コマ漫画のみを対象としてきたのに対し、本論文は4コマ漫画という未開拓の領域に踏み込む。たとえば、本論文の冒頭で触れた茨木正治は、政治漫画を理論的、かつ実証的に検討した日本では数少ない研究者であるが、彼の一連の研究は1コマ漫画だけに焦点をあてている。（5）

関連して第2に、ただでさえ少ない新聞4コマ漫画の先行研究のなかでも、政治的な表現内容に着目してそれを実証的・体系的に分析する本論文のような試みは、なおさら希少である。その主因として、一般的に新聞4コマ漫画が「一種の清涼剤 [として] 読者に息抜きをさせる」ものとし理解されていない点が考えられる。新聞4コマ漫画を質的に分析している若干の既存文献にしても、小泉首相の描かれ方を論じた先行研究をほぼ唯一の例外として、政治や政治指導者を研究対象としているわけではない。（6）

第3に、政治的コミュニケーション学の観点からも本論文の意義は小さくない。画像と文字を組みあわせることのできる漫画表現には、受け手の政治認識に与える影響やジャーナリズムの権力監視・番犬機能という点で、無視できない特性があるからである。フェルドマン・オフェル（Feldman Ofer）は、「マンガは、現代国家において、政治的コミュニケーションの重要な役割を担っている。これは読者に昨今の政治社会状況を知らしめると同時に、その状況を雄弁に解説し、国内外の事態についての理解に役立っている」と指摘している。前述の茨木も、政治を扱うことで漫画は「読み手である一般庶民に情報を提供し、あわせて政治権力をつかさどる様子を批判的に表し……政治における認識と態度を形成する一助となる」と論じている。より最近では、アメリカ史研究者の金澤宏明が「民衆に対して政治意識を流布し、賛同あるいは批判を促す媒体」としての政治漫画の史料価値を評価している。政治認識を形成する機能や権力監視・番犬機能が1コマ漫画だけに認められて、新聞4コマ漫画に認められないと考える理由はない。本論文は、新聞4コマ漫画の政治的コミュニケーションとしての機能・性質の理解にも貢献することができる。（7）

本論文の構成についても説明しておく。まず、次項「2 量的な側面から見た全体的な傾向」では、時間枠から抽出された作品群を集計し、量的な側面から全体的な傾向を把握する。それをふまえ、「3 新聞4コマ漫画が描く安倍・福田首相」で作品の質的な内容分析をおこなう。最後の「4 結論分析・知見の総括」では、分析から得た知見を総括し、先行研究のそれとも比較しながら今後の課題などを提示し、さらに新聞4コマ漫画の権力監視・番犬機能について若干の考察を示す。

紙幅制限により、本論文は前編・中編・後編にわけて掲載する。本号掲載の前編では、「2 量的な側面から見た全体的な傾向」までをまとめる。本誌次号に掲載予定の中編では、『毎日新聞』の「アサッテ君」と「ウチの場合は」、そして『読売新聞』の「コボちゃん」の質的な内容分析をおこなう。さらにその次の号に掲載予定の後編では、『朝日新聞』の「ののちゃん」と「地球防衛家のヒト

ピト」を同じ方法で分析し、結論につなげる。

最後に、本論文中で言及される人物の役職等はすべて当時のもので、敬称は省略している。

2 量的な側面から見た全体的な傾向

本項では、本論文の主目的である質的な内容分析をおこなう前段階として、安倍・福田首相を描いた新聞4コマ漫画を量的な側面から見ることで、その全体像を俯瞰する。

知見の記述に移る前に、量的なアプローチをとる本項では、前述した「首相を描いている作品」の定義に合致しない作品や時間枠外（在任期間外）に掲載された作品はすべて除外してあることを断っておく。量的な手法を採用するがゆえに、明確な基準で取捨選択をする必要があるからである。もちろん、厳密には定義に合致しなくても、あるいは時間枠外であっても、本論文の趣旨に照らして参照すべき作品はある。それらは、質的な分析をする次項で補足的に扱う。

まず、もっとも基本的な作業として、両首相の在任期間中、それぞれの4コマ漫画がどのくらいの頻度と本数で首相を登場させたかを調べたところ、表1のような結果が得られた。

表1 安倍・福田首相を描いた作品の頻度と本数（漫画別）

	安倍首相	福田首相	合計
「アサッテ君」(東海林さだお) 『毎日新聞』(朝刊)	2.37% (337本中8本)	0.59% (335本中2本)	1.48% (672本中10本)
「ウチの場合は」(森下裕美) 『毎日新聞』(夕刊)	0.40% (245本中1本)	0.00% (280本中0本)	0.19% (525本中1本)
「コボちゃん」(植田まさし) 『読売新聞』(朝刊)	0.00% (356本中0本)	0.28% (355本中1本)	0.14% (711本中1本)
「ののちゃん」(いしいひさいち) 『朝日新聞』(朝刊)	0.00% (354本中0本)	0.00% (355本中0本)	0.00% (709本中0本)
「地球防衛家のヒトピト」(しりあがり寿) 『朝日新聞』(夕刊)	3.72% (295本中11本)	2.72% (294本中8本)	3.22% (589本中19本)
合計	1.26% (1,587本中20本)	0.67% (1,619本中11本)	0.96% (3,206本中31本)

「ウチの場合は」は、安倍首相の在任期間中に1ヵ月強の休載（2007年1月22日号～2月28日号）をしている。

一見して、両首相とも「地球防衛家のヒトピト」と「アサッテ君」で多く描かれていることがわかる。首相ごとに頻度を比べると、安倍では「地球防衛家のヒトピト」の3.72%、「アサッテ君」の2.37%、「ウチの場合は」の0.40%、という順になる。他方、福田では「地球防衛家のヒトピト」の2.72%、「アサッテ君」の0.59%、「コボちゃん」の0.28%、という順になる。本数で見ると、両首相とも実に90%以上が「地球防衛家のヒトピト」と「アサッテ君」で占められている。なお、先行研究によれば、小泉首相では「地球防衛家のヒトピト」の3.10%（1,320本中41本）、「アサッテ君」の0.87%（1,825本中16本）、「コボちゃん」の0.05%（1,922本中1本）、「ウチの場合は」の0.00%（1,318本中0本）、という順になり、多少の差はあるが、「地球防衛家のヒトピト」が突出して高く、それに「アサッテ君」がつづく点は共通している。

他方、首相を描くことがない（少ない）漫画に目をむけると、安倍では「コボちゃん」と「ののちゃん

ん」、福田では「ウチの場合は」と「ののちゃん」が0.00%である。「ののちゃん」では、いずれの首相も描かれていない。この傾向も小泉政権時から変わっておらず、「ののちゃん」に小泉が登場したのは0.20%（1,927本中4本）にすぎず、上述のとおり「コボちゃん」では0.05%、「ウチの場合は」では0.00%であった。

以上の結果から、3大全国紙の4コマ漫画では、首相を描く漫画と描かない漫画との間はかなり大きなへだたりがあることがわかる。次項（中編・後編）の質的分析で詳説するが、首相が多く登場する漫画は時事性が強く、そうでない漫画は家庭色が強いという特徴が見られる。前者には「アサッテ君」と「地球防衛家のヒトビト」が、後者には「ウチの場合は」・「コボちゃん」・「ののちゃん」があてはまる。この特徴は先行研究でも指摘されている。政治指導者を題材とする頻度の多寡に限っていえば、小泉政権以来、各漫画の作風はほぼ一貫している。

また、表1からは、福田よりも安倍のほうが4コマ漫画に「描かれやすい首相」であったことがわかる。すべての漫画を総合すると、安倍の1.26%（1,587本中20本）に対し、福田はわずか0.67%（1,619本中11本）にすぎない。頻度・本数とも、2人の間には約2倍の開きがある。

もちろん、福田が「描かれにくい首相」であったということもできるが、小泉と2人を比べると、安倍の「描かれやすさ」がなお際立つ。5年5ヵ月にわたる在任期間中（2001年4月26日～2006年9月26日）、3大紙の全4コマ漫画の総計で小泉は0.83%（9,565本中80本）の作品で描かれていた。確かに福田（0.67%）よりは頻繁であるが、安倍（1.26%）には及ばず、安倍・福田の平均（0.96%）よりも低い。頻度を基準に「描かれやすい首相」を順位づけると、安倍が突出し、小泉と福田がつづくことになる。小泉は内閣の平均支持率でもマス・メディアの注目度でも明らかに後継者の2人に勝っていたが、その小泉を押さえ安倍がもっとも頻繁に描かれている事実は、新聞4コマ漫画の首相描写を理解する上で注目に値する。さらにいえば、先行研究も示唆しているように、4コマ漫画が「小泉劇場」を比較的冷静に受けとめていたともいえる。内閣支持率との関係については後述する。

次に、同じデータを新聞別に集計したところ、表2のような結果が得られた。

表2 安倍・福田首相を描いた作品の頻度と本数（新聞別）

	安倍首相	福田首相	合計
『毎日新聞』	1.54%(582本中9本)	0.32%(615本中2本)	0.91%(1,197本中11本)
『読売新聞』	0.00%(356本中0本)	0.28%(355本中1本)	0.14%(711本中1本)
『朝日新聞』	1.69%(649本中11本)	1.23%(649本中8本)	1.46%(1,298本中19本)

両首相とも、『朝日新聞』・『毎日新聞』・『読売新聞』の順でより頻繁に描かれており、とくに『朝日新聞』の突出ぶりが際立つ。ただし、安倍の場合は『朝日新聞』（1.69%、11本）と『毎日新聞』（1.54%、9本）が拮抗しているのに対し、福田の場合は『朝日新聞』（1.23%、8本）が突出し、大きく離れて『毎日新聞』（0.32%、2本）と『読売新聞』（0.28%、1本）がつづいている。どちらについても留意すべきは、『朝日新聞』と『毎日新聞』で首相を描いているのは、安倍を登場させた「ウチの場合は」の1本をのぞき、すべて「アサッテ君」と「地球防衛家のヒトビト」だという事実である。また、『読売新聞』の夕刊には4コマ漫画が連載されていない点も考慮に入れる必要がある。なお、小泉の場合は『朝日新聞』（1.27% = 3,520本中45本）、『毎日新聞』（0.62% = 3,186本中20本）、

『読売新聞』(0.52% = 2,859本中15本)で、順序は同じであるが、『朝日新聞』が突出している点で安倍よりも福田に近い。

さらに、同じデータを朝・夕刊別に集計すると、表3のようになった。

表3 安倍・福田首相を描いた作品の頻度と本数(朝・夕刊別)

	安倍首相	福田首相	合計
朝刊	0.76%(1,047本中8本)	0.29%(1,045本中3本)	0.53%(2,092本中11本)
夕刊	2.22%(540本中12本)	1.57%(574本中8本)	1.89%(1,114本中20本)

両首相とも夕刊の漫画でより多く描かれており、2人を合計するとその差は頻度で3倍以上、本数で2倍近くになる。小泉にも同じ傾向が見られ、朝刊の0.37%(5,674本中21本)に対し夕刊が1.51%(3,891本中59本)と、実に4倍以上の頻度、3倍近くの本数で夕刊の漫画に多く登場していた。漫画家の小島功は、「朝刊の4コマは家庭漫画、夕刊の4コマは時事的なネタを盛り込むという[のが]従来の新聞マンガのスタイル」と指摘しているが、その傾向は小泉政権時から安倍・福田両政権時まで継続しているといえる。(8)

ただし、新聞別の比較(表2)と同様に、朝・夕刊別の数値の大多数は「アサッテ君」と「地球防衛家のヒトヒト」で占められており、また『読売新聞』の夕刊には4コマ漫画が連載されていないため、一般化には慎重を要する。それぞれの4コマ漫画は一個人の作者により継続的に描かれる。したがって、異なる漫画を横断的にまとめて全体的な傾向を把握する一方で、漫画ごとにその特質や傾向を詳しく検討することが必要不可欠である。本論文が質的分析に主軸を置くのはそのためである。

次に、首相を描いた作品数と内閣の平均支持率(朝日新聞社の定例世論調査から算出)を、在任期間の前半と後半にわけて比較したところ、表4のようになった。両首相とも9月から翌年の9月までが在任期間であるため、前半は9月から翌年2月まで、後半は3月から9月までとした。

表4 安倍・福田首相を描いた作品数と内閣の平均支持率

	作品数	平均支持率
安倍首相 前半(2006年9月~2007年2月)	6本	50.33%
安倍首相 後半(2007年3月~2007年9月)	14本	35.00%
福田首相 前半(2007年9月~2008年2月)	2本	41.00%
福田首相 後半(2008年3月~2008年9月)	9本	24.43%

両首相に共通しているのは、支持率が比較的に高い前半よりも、支持率を失った後半のほうがはるかに多くの作品で取りあげられていることである。安倍は前半の6本に対し後半は2倍以上の14本、福田ではさらにその傾向が強まり、前半のわずか2本に対し、後半は4倍以上の9本で描かれている。支持率が低下するにつれ、より描かれやすくなっていることがわかる。

この結果は小泉と比べ対照的で、注目に値する。小泉の場合、「絶頂期」にあたる首相就任の初年に全作品の4分の1強(80本中21本)が集まっていた。いちじるしく不人気であった森喜朗首相に代わった小泉新首相は、国民の期待を一手に集め、就任した2001年中の内閣平均支持率は75%を超え

ていた。その人気ぶりは、「小泉フィーバー」とよばれ社会現象になった。4コマ漫画で小泉がもっとも頻りに描かれたのは、この最盛期であった。その後、小泉内閣の支持率は徐々に下降していくが、安倍・福田のように支持率の低下と反比例して作品数が増えることはなく、最終年まで一定数の作品で描かれつづけた。これまでの分析ではもっぱら小泉との共通性が支持されてきたが、作品数と内閣支持率の関係では、小泉と安倍・福田の間には明確な差が見られる。(9)

上述の知見をより詳しく分析するために、安倍・福田を描いた作品数と内閣の支持率を月ごとに集計した結果が、表5と表6である。

表5 安倍首相を描いた作品数と内閣の平均支持率（月別）

	支持率	合計	アサッテ君	ウチの場合は	コボちゃん	地球防衛家のヒトビト
2006年9月	63%	1	1	0	0	0
10月	63%	1	0	0	0	1
11月	53%	1	0	0	0	1
12月	47%	0	0	0	0	0
2007年1月	39%	1	0	0	0	1
2月	37%	2	1	0	0	1
3月	38%	0	0	0	0	0
4月	40%	1	1	0	0	0
5月	43%	0	0	0	0	0
6月	30%	0	0	0	0	0
7月	28%	2	0	0	0	2
8月	33%	4	2	0	0	2
9月	33%	7	3	1	0	3

表6 福田首相を描いた作品数と内閣の平均支持率（月別）

	支持率	合計	アサッテ君	ウチの場合は	コボちゃん	地球防衛家のヒトビト
2007年9月	53%	1	0	0	0	1
10月	53%	0	0	0	0	0
11月	45%	0	0	0	0	0
12月	31%	0	0	0	0	0
2008年1月	34%	1	0	0	0	1
2月	30%	0	0	0	0	0
3月	28%	0	0	0	0	0
4月	25%	0	0	0	0	0
5月	19%	1	0	0	0	1
6月	23%	1	0	0	0	1
7月	21%	0	0	0	0	0
8月	25%	1	0	0	0	1
9月	30%	6	2	0	1	3

2008年9月の支持率（30%）は、福田首相の突然の辞任表明を受け朝日新聞社がおこなった緊急RDD調査で、「福田首相の1年間の実績をどの程度評価するか」という質問に対し「評価する」（1%）、「ある程度評価する」（29%）と答えた人の割合を合計した数値である。辞任を表明したのが9月1日だったため、9月の定例世論調査は実施されなかった。

両首相に共通するのは、突然の辞任表明前後に作品が集中していることである。安倍は2007年9月

12日に辞任を表明したが、同じ月に7本の作品で描かれている。これは、安倍を描いた全作品20本の約3分の1にあたる。そして、その7本のうち6本は明確に安倍の進退を主題としている。

福田の場合、さらにその現象は顕著である。2008年9月1日に辞任を表明したのち、立てつづけに6本の作品で描かれている。福田を描いた全作品11本の半数以上が辞任表明後に集まっており、しかも、そのすべてが辞任に関連する内容である。支持率の低下もさることながら、唐突な辞任表明をめぐり、首相を題材とする作品が急増していたことがわかる。

以上の知見を総合すると、新聞4コマ漫画が首相を描く多寡に影響を与えるのは、支持率の数字そのものよりも、支持率が高いにせよ低いにせよ、どれだけ社会の注目を浴びているかである、という仮説がなり立つ。つまり、小泉が就任当初に多く描かれたのは、空前の高支持率が大きな話題になっていたからであり、他方、安倍・福田が政権末期に多く取りあげられたのは、支持率が低迷した末の突然の辞任表明が社会を驚かせたからである、と考えられる。在任期間全体で見ても、前述のとおり、吉田茂内閣以降、戦後の自民政権でもっとも高い平均支持率(50%)を獲得した小泉よりも、支持率が低迷し短命に終わった安倍のほうが頻繁に描かれている。もちろん、この仮説の正しさを本論文だけで検証することはできない。内閣支持率や社会的注目度と4コマ漫画の首相描写との関係は、さらに事例研究を積みかさねて解明をすすめる必要がある。

最後に、安倍・福田を示すシンボル(画像・文字・画像と文字)を4コマ漫画ごとに分類し集計したところ、表7のような結果が得られた。

表7 安倍・福田首相を示すシンボル(漫画別)

	画像のみ		文字のみ		画像と文字	
	安倍	福田	安倍	福田	安倍	福田
「アサッテ君」	4本	1本	3本	1本	1本	0本
「ウチの場合は」	0本	0本	1本	0本	0本	0本
「コボちゃん」	0本	0本	0本	1本	0本	0本
「ののちゃん」	0本	0本	0本	0本	0本	0本
「地球防衛家のヒトビト」	4本	2本	1本	1本	6本	5本
各首相合計	8本	3本	5本	3本	7本	5本
両首相合計	11本		8本		12本	

両首相ともシンボルの偏りはあまりないが、強いていえば、文字よりも画像のほうがやや多用される傾向があるように見える。漫画という表現形態を考えれば、全体として画像の使用が文字を上回ることは不自然でない。しかし、前任者の小泉は画像よりも文字により描写されることのほうが多かった(画像のみ=27本、文字のみ=39本、画像と文字=14本)。比較的、文字で描かれることが多かった小泉に対し、安倍・福田は画像で描かれることがやや多かったことがわかる。

シンボル使用をめぐり小泉と安倍・福田との差を断定的に説明するのは難しいが、1つの要因として、小泉の在任期間中に連載されていた「サンワリ君」(『読売新聞』夕刊、鈴木義司)の有無をあ

げることができる。2001年4月の小泉首相就任から2004年7月の連載停止まで、「サンワリ君」は14本の作品で首相を描いているが、そのうち実に13本が文字のみ（残り1本は画像のみ）で描いていた。極端に文字を多用する「サンワリ君」を単純に差し引けば、小泉を示すシンボルは画像のみと文字のみが同数となり（画像のみ＝26本、文字のみ＝26本、画像と文字＝14本）安倍・福田との差は縮まる。

もちろん、特定の漫画の有無だけでシンボル使用の傾向を説明できるわけではない。上述したように、漫画で画像が多用されることに不自然さはないにせよ、「新聞4コマ」漫画の特性を考えれば、その逆も真となりえる。つまり、先行研究が指摘しているように、「現実の政治家や政治問題をデフォルメする1コマの風刺漫画とは異なり、4コマ漫画では政治家本人が主人公になりにくい。その結果として、文字により説明的に首相を描く必要性が高まるのかもしれない」という仮説も十分に妥当性がある。また、外見・身体的特徴や政治的手法など、各首相がもつ個別の要素を無視することもできない。首相を描く新聞4コマ漫画のシンボル使用についても、今後さらに事例を積みかさね、継続的に検討していく必要がある。

【注】

- (1) 茨木正治『メディアのなかのマンガ 新聞一コママンガの世界』（臨川書店、2007年）、16。
- (2) 新聞漫画を含め、アメリカ・ジャーナリズム史を要領よく概説した研究書として、Edwin Emery and Michael Emery with Nancy L. Roberts, *The Press and America: An Interpretive History of the Mass Media* 9th ed. (Needham Heights, MA: Allyn and Bacon, 2000)がある。日本における新聞漫画の歴史を概説した最近の文献として、川崎市市民ミュージアム編『日本の漫画300年』（川崎市市民ミュージアム、1996年）、清水勲『図解 漫画の歴史』（河出書房新社、1999年）、ニュースパーク（日本新聞博物館）編・春原昭彦監修『新聞漫画の眼 人 政治 社会』（ニュースパーク、2003年）、清水勲『四コマ漫画 北斎から「萌え」まで』（岩波新書、2009年）などがある。
- (3) 新聞4コマ漫画の政治的内容を学術的な方法で検討した数少ない先行研究として、新庄彩子ほか「新聞4コマ漫画が描く小泉劇場 小泉純一郎首相在任期間中の3大紙の4コマ漫画に関する一分析 2001～2006（前編）」『情報研究』第37号（2007年7月）：47～84、新庄彩子ほか「新聞4コマ漫画が描く小泉劇場 小泉純一郎首相在任期間中の3大紙の4コマ漫画に関する一分析 2001～2006（後編）」『情報研究』第38号（2008年1月）：23～58、がある。なお、水野剛也「漫画のなかの小泉純一郎首相 首相在任期間中の『朝日新聞』4コマ漫画を中心として」『朝日総研レポート（AIR21）』第206号（2007年7月）：16～53は、上述の論文から『朝日新聞』の4コマ漫画の分析部分を抜粋したダイジェスト版である。
- (4) Todd Gitlin, *The Whole World is Watching: Mass Media in the Making and Unmaking of the New Left* (Berkeley and Los Angeles, CA: University of California Press, 1980), 7. フレーム概念を政治漫画分析に関連づけて概説した先行研究として、茨木正治『「政治漫画」の政治分析』（芦書房、1997年）、茨木正治「政治漫画に見る内閣 選挙報道における森喜朗内閣と小泉純一郎内閣」『北陸法學』第9巻・第2号（2001）：29～50、などがある。ニュースのフレームについては、Gaye Tuchman, *Making News: A Study in the Construction of Reality* (New York: Free Press, 1978)なども参考になる。
- (5) もちろん、新聞の1コマ漫画はまさに政治・政治家を批評すること主目的としており、それゆえに先行研究が1コマ漫画を優先してきたことには十分な根拠がある。
- (6) 山口佐栄子「4コマ漫画」、夏目房之助・竹内オサム編・著『マンガ学入門』（ミネルヴァ書房、2009年）、8。新聞4コマ漫画を質的に分析している文献として、次のようなものがある。高坂文雄『笑う戦後史』（トランスビュー、2002年）、岩本茂樹『戦後アメリカニゼーションの原風景 『ブロンディ』と投影されたアメリカ像』（ハーベスト社、2002年）、岩本茂樹『憧れのブロンディ 戦後日本のアメリカニゼーション』（新曜社、2007年）。
- (7) フェルドマン・オフエル「政治マンガに見る『日本の首相』」『潮』1993年12月号：120、茨木『「政治漫画」の政治分析』190、金澤宏明「史料としての合衆国の政治カートゥーン アメリカ対外関係史研究と画像分析」『アメリカ史研究』第32号（2009年）：126。
- (8) 大島透「加藤芳郎さん、47年間 『まっぴら君』ありがとう まっぴら君とその時代」『毎日新聞』2002年11月5日夕刊。
- (9) 小泉内閣の支持率は、吉田貴文「小泉内閣5年5カ月、政策より個性でみせた『劇場政治』 全国世論調査報告（2001年4月～2006年8月）」『朝日総研レポート（AIR21）』第198号（2006年11月）：176～189が詳細に分析している。

【Abstract】

**Prime Ministers Shinzo Abe and Yasuo Fukuda
in Newspaper Comic Strips (Part 1):**

An Analysis of Comic Strips in the Three Major National Newspapers in Japan 2006-2008

Takeya Mizuno and Tomomi Fukuda

This research attempts to analyze qualitatively (and partly quantitatively) how comic strips of the three major national newspapers in Japan, *Mainichi*, *Yomiuri*, and *Asahi*, both in morning and in evening editions, portrayed Prime Ministers Shinzo Abe and Yasuo Fukuda during their tenures, from September 26, 2006 to September 26, 2007 and from September 26, 2007 to September 24, 2008, respectively.

As the first installment of a three-part series, this article (Part 1) explains the purpose, method, and significance of the research, and then highlights quantitative findings.

The second and third installments (Parts 2 and 3) will appear in upcoming issues, in which comic strips of *Mainichi*, *Yomiuri* and *Asahi* are analyzed qualitatively, and conclusions are presented.